

平成18年度事後評価結果（平成18年11月）

[研究開発課題名] 人間情報コミュニケーションの研究開発
 [委託機関名] 株式会社 国際電気通信基礎技術研究所

項目	評価	総合所見
総合所見	A	<p>(技術関係)</p> <p>4つの機構の間でまたその中でも、目標の達成度、得られた知見や技術の新規性にはバラツキがあることは否めない。具体的には、コミュニケーション計算神経機構は、Nature Neuroscienceに掲載されるなど、新規性の点で非常に優れた研究成果を生み出している。また、開発したMEGとMRIデータの統合技術も、応用範囲が広く重要な技術だと言える。音声言語コミュニケーション機構では、調音運動や高精度の声道形状観測法、それにもとづく音声の個人性要因の解明など高い新規性を持つ基礎的研究成果を得ている。開発的側面から見るとコミュニケーション創発機構では、ネットワークシミュレータの実際の運用にこれからの面が多少残っている。音声コミュニケーション機構が開発した外国語学習システムと外国語訛り矯正システムはその評価が十分でないという感が否めない。また、視覚認知コミュニケーション機構が開発した3Dトーキングヘッド技術は、競合他組織・他社の研究成果や製品に対する優位性が明確ではない。全体としては、基礎的研究に優れたものが認められるので、その将来に期待できるものと考えられる。</p> <p>(事業化関係)</p> <p>研究開発成果を7分野で事業化する計画であり、主な収益源はネットワークシミュレータ事業とATR-CALLとなっている。</p> <p>ネットワークシミュレータ事業においては、処理対象間の相互作用を超並列・超高速に計算・処理できるシミュレータを用いて、創薬シミュレーションの請負サービスや高速演算の請負サービスに加えて、高機能（高速）サーバの販売までを対象としており、現在ニーズはあるもののコスト等の問題からスーパーコンピュータを適用できない分野に対しての市場開拓が期待される。</p> <p>ATR-CALLにおいては、就学前の児童から学生、さらには一般までの幅広い層における英語学習者をターゲットにしており、技術的優位性から一定のシェア獲得が期待される。</p>

(注) 総合所見の公表にあたっては、企業秘密等に配慮しています。